

【いかす】

村長に、烏賊博士（いかはかせ）の処へ行ってほしいと頼まれた。

頼まれると、厭と云えない性格のぼくは、どこか胡散（うさん）臭い空気が漂う
昼下がりに、博士の居る町の洋館へ行きました。

立派だけれども、古い。

古くて汚い。

「おぼんです。いかはかせは、おるかのう」

「居らん」

「そのこえは、だれじゃ」

「この声は、烏賊の声ではない」

「いかでのうたら、たこかのう」

「鮪のわけはない」

「たこでのうたら、うにかのう」

「海胆に聞こえるかい」

「いんや、いそぎんちゃくに、きこえるがのう」

「磯巾着でもない」

「なんでもええ。わしは、そんちょうに、たのまれたんじゃ」

「村長に、何を」

「きまっとるじゃろ。いかはかせが、いかすはつめいをしとるから、ぬすんでこい
や、とたのまれたんじゃ」

「僕の発明が、いかすだって」

笑った。

「ほら、やっぱし、いかはかせじゃ」

「ばれたか。実は僕が烏賊博士」

姿を顕わした。

よれよれの白衣を、映画の英雄みたいにひらひらさせた。

烏賊というよりも、莫迦という感じのおやじ。

「どうせ、ばれるんだから、はじめからいえや」

「済まん」

「して、いかすはつめいは、どこじゃ」

「発明かあ」

また笑った。

「わらうな」

「済まん。しかし、僕の発明は盗めない」

「なぜじゃ」

「いかすじゃなくて、烏賊墨だからね」

「なんでもええ。そいつをくれや」

「あげられない。なぜって、僕はこれから消えてしまうからさ」

そう云ったとたん、烏賊博士は、烏賊墨を吐き出し、あたりを真っ黒にして、洋館の天井に吸い込まれて、完全に消えてしまいました。

ぼくは烏賊墨を全身に浴びて、真っ黒になって帰りました。

村長は大喜びで、

「さすがは金ちゃんだ。烏賊博士の烏賊墨を、上手に盗んできましたねえ」

ぼくは不機嫌で、

「ぬすんできたんじゃないねえ。あびてきたんじゃない」